

第1回（平成11年度）
安田火災記念財団賞
受賞者記念講演録

著書部門

『ピアトリス・ウェブの福祉思想』

淑徳大学 助教授 社会福祉学博士 金子 光一

論文部門

『介護保険制度下におけるケアシステムの未来』

国立公衆衛生院 主任研究官 工学博士 筒井 孝子

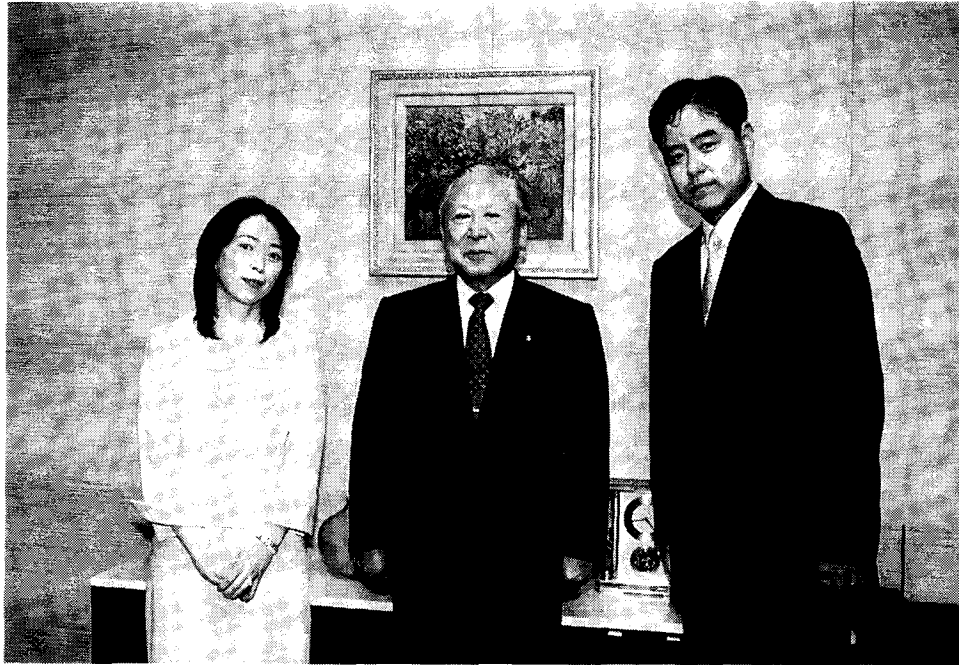
日時：平成12年5月24日午後3時より

場所：安田火災海上本社ビル39階会議室

平成12年6月

財団法人安田火災記念財団

第1回安田火災記念財団賞受賞者



左より筒井孝子氏、安田火災記念財団後藤康男理事長、金子光一氏

目 次

安田火災記念財団賞の生い立ち	1
財団法人安田火災記念財団専務理事 堀内生太郎	
「ピアトリス・ウェブの福祉思想」(著書部門)	3
淑徳大学助教授 社会福祉学博士 金子光一	
「介護保険制度下におけるケアシステムの未来」(論文部門)	13
国立公衆衛生院主任研究官 工学博士 筒井孝子	
<u>付 (第1回安田火災記念財団賞贈呈式資料)</u>	
主催者挨拶 財団法人安田火災記念財団理事長 後藤康男	24
祝辞 厚生大臣 丹羽雄哉	25
審査講評 安田火災記念財団賞審査委員長 三浦文夫	26

第1回安田火災記念財団賞贈呈式



主催者挨拶 有吉副理事長



贈呈式会場（安田火災本社ビル4 3階）

安田火災記念財団賞の生い立ち

財団法人安田火災記念財団

専務理事 堀内生太郎

本日は皆様ご多忙のところ、第1回の安田火災記念財団賞受賞記念講演会にご参集いただきまして誠に有り難うございました。

受賞された金子光一様、筒井孝子様には、心からお慶びを申し上げます。

これからお2方の講演が始まりますが、講演に先立ち、この賞の創設された経緯をご説明申し上げたいと存じます。

安田火災記念財団は昭和52年(1977年)に設立され、今日まで社会福祉事業と福祉諸科学事業の2本立ての事業内容を継続してまいりました。しかし設立後20年経ちますと、新しい時代にマッチした事業内容を考える必要が生じてまいりました。

そこで、財団事務局では今後の事業のあり方の検討に着手し、財団に関係する諸先生方にも種々ご相談申し上げてまいりました。特に社会福祉の学術研究の面では、財団として資金的な制約がある中で、どのような活動がより多くの研究者の方々に参画していただけるだろうかということで、ご意見を頂戴しておりました。

1997年、今から3年前、当財団の福祉諸科学選考委員で、当時法政大学、現在は

立教大学の高橋紘士教授から、社会福祉に関する色々な賞はあるが、社会福祉の文献を表彰するというのはいらないのでは、文献賞というのも選択肢の1つに考えていいのではないかと、というご示唆を頂きました。

その後多くの方々にご相談し、調査してまいりましたが、社会福祉に関する学術研究賞で一般に知られている賞は非常に少なく、社会学の大家である故福武直先生を記念した福武賞、厚生行政に関連した研究活動に対する故吉村仁厚生事務次官を記念した吉村賞、こういうところが関係者の間で知られているぐらいでございまして、これから新進気鋭の福祉学を志す方にとって目標とするような賞というのは、見当たらない。そこで、やはりこの文献賞は非常に有意義なのではないかということになりまして、財団創設以来、財団の選考委員、評議員として、また本賞の審査委員長もお願いしております三浦文夫先生にご相談申し上げ、具体的な作業を進めてまいりました。そして出来上がったのが、本日第1回の贈呈式を迎える社会福祉学術文献表彰制度「安田火災記念財団賞」であり

ます。

本日の安田火災記念財団賞、この副賞は著書部門が100万円、論文部門が30万円となっております。この金額をどの程度にするか、他の賞を参考に検討いたしました。

わが国の賞について東海大学が詳細に調査した資料を拝見しますと、文献賞では機械工学関係の文献で200万円というのが一番大きく、50万円から100万円位が一般的なところですが、これらを参考にいたしまして、研究助成金として著書部門100万円、論文部門30万円で、この記念財団賞をスタートさせるということになった次第であります。

それからもう1つ問題になりましたのが、対象者の制限でございます。新進気鋭の中堅・若手が対象ということでございますが、この福祉の世界は非常に急激な広がりを見せており、実践の場から研究の場へ移られる方がかなり多い。そうしますと、40、50歳から大学に助教授、講師として入られる方はどうなるのか。こういう方も研究業績上では一応中堅若手となるのかなということになりますと、なかなか年齢では区切りにくいということで、抽象的でございますが、「中堅・若手」ということで対象者を決定させていただきまして、今日に至っております。

もう1つの問題は、公募制度にするか、推薦制度にするかであります。結論としては、多数の応募があると事務局の対応が非常に難しいということで、指定推薦者制度

をとらせていただきまして、日本社会福祉学会、日本地域福祉学会、この2つの学会の理事の方々を中心に、あとは社会事業学校連盟の加盟校の代表者や国立社会保障・人口問題研究所長にご推薦いただく、その他福祉関係の特定の出版社等にご推薦いただくという制度をとりまして、この賞を運用することにいたしました。

審査委員につきましては、先ほどからご紹介申し上げておりましたように、審査委員長長の三浦文夫先生をはじめ、右田紀久恵、大橋宗夫、岡本民夫、園田恭一、田端光美という、いずれもわが国を代表する6人の先生方をお願いし、ご多忙の中を再三にわたり文献の審査に当たっていただきまして、本日の第1回の対象文献として著書部門が1件、論文部門が1件、決定した次第でございます。

現在、平成12年度安田火災記念財団賞の対象文献のご推薦を、指定推薦者の方々にお願いしております。これは7月末を締切期限としており、平成11年度中に出版された著書及び論文についてご推薦いただきまして、それを審査委員会で審査選考し、最終的には理事会の承認を経て第2回の賞の受賞者を決定する運びになっております。

以上、簡単ではございますが、この賞の発足の経緯をご説明いたしました。今後ともこの賞の運営につきまして、皆様方の暖かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

『ピアトリス・ウェップの福祉思想』

淑徳大学助教授

社会福祉学博士 金子 光一

ただ今ご紹介いただきました淑徳大学の金子光一です。3年前に出版した『ピアトリス・ウェップの福祉思想』という本が、このたび、栄えある第1回の安田火災記念財団賞を頂戴することになりまして、大変光栄に思っております。また本日は社会福祉関係の学会及び財団の著明な先生方のご臨席を賜りまして、心よりお礼申し上げます。

受賞の前に30分程度のお話をというご依頼を受けましたので、本日お配りさせていただいた資料に基づいて、この本の概要を大体15分ぐらい、それから後半の15分はこの本の問題点・課題等について、そしてさらには今後の研究の方向性について、私なりの考えを述べさせていただきたいと思っております。

まず最初に問題の所在として、1970年代ぐらいまでのイギリスというのは、保守党と労働党がご承知のとおり、交互に政権を取りまして、両者の妥協と合意から中道的な政策が取られ続けておりました。ところが1980年代に入りまして、正確には1979年の5月から3期にわたって、マーガレット・サッチャー(Margaret Thatcher)という女性が首相になりました。そして、小さな効率的な政府を実現するため、公費削減や民間活力の推進等を柱とする、新自由主義、新保守主義政策を展開いたしました。これは戦後からずっと続いていた座標軸が右側に大きくシフトしたことを意味しております。

本書作成の1997年の今ごろ、サッチャー元首相及びその後を引き継いだジョン・メイジャー(John Major)前首相の一連の政策に対する振り戻しをイギリスは経験いたしました。公的部門で行われるべき福祉サービスを、市場経済の活力に依存した結果、競争原理は働いたんですが、負担能力による格差が生まれ、サービスの平等は著しく妨げられました。また、全国民を対象に行われている包括的なサービスで非常に有名な国民保健サービス(National Health Service)、通称NHSと呼ばれておりますが、その中に供給者(provider)、購買者(purchaser)の市場概念を盛り込ん

だ結果、各自治体から多くの批判が出て、自治体社会主義や協同組合の新しい動きが活発化しました。そしてその結果として、1997年5月に、ちょうどこの本を作成するところでありますが、トニー・ブレア（Tony Blair）を党首とする労働党が世論の圧倒的な支持を得て、政権を獲得いたしました。

このような社会体制の変化というものは、もちろん時代や社会背景の違いはありますが、イギリスがすでに約100年前に経験をしていることでありまして、その背景となる基本思想に立ち返る必要性を感じ、その中で、今日につながる重要な政策提言を行ったイギリス人、ビアトリス・ウェブに焦点を当てて、本書を作成いたしました。

ウェブ夫妻と通常呼ばれているシドニー・ウェブ（Sidney Webb）とビアトリス・ウェブの夫妻に関する研究は経済学や社会学、社会政策学において少なくありません。ところが、それらのほとんどがシドニー・ウェブに重点を置いたり、あるいはフェビアン協会の、いわゆるフェビアン社会主義（Fabian Socialism）に重点を置くもので、シドニーの妻であるビアトリス・ウェブを、シドニーあるいはフェビアン社会主義と切り離れた形で検証したものは非常にまれであります。ところが彼女の福祉思想というものは経済学とか社会学と同様に、あるいはそれ以上に、今日の社会福祉学につながる部分を多く含んでおりまして、そのような視点から私はこの研究に取りかかったわけであります。

イギリスの先行研究におきましても、この傾向が見受けられましたが、近年それに対する修正が行われております。通常2人1組で考えられたものをシドニー・ウェブとビアトリス・ウェブと2人分けて検証したものでは、例えばジェーン・ルイス（Jane Lewis）やキャロル・セイモアジョーンズ（Carole Seymour-Jones）などが、主にジェンダーの視点から社会調査研究に情熱を燃やした女性としてビアトリス・ウェブを再評価しております。また、今年、2000年に入ってから出されましたロイデン・ハリソン（Royden J.Harrison）が書いた、『シドニー・ウェブとビアトリス・ウェブの生涯と時代』（The Life and Times of Sidney and Beatrice Webb）、中でも、シドニーとビアトリスの相違点というものを明確にするために両者の結婚する前の活動に多くの紙面を割いております。

以上の問題意識に基づいて、社会福祉学におけるビアトリス・ウェブの新たな位置付け、新たなというか、歴史の事実にも忠実な位置付けというものを試みたのが本書であります。

本書は4篇で構成されております。第1篇はシドニーと結婚する前のビアトリス、ビアトリス・ポッターという名前でありましたが、そのビアトリス・ポッターの思想

形成過程に着目をいたしました。特に家庭教師のハーバード・スペンサー（Herbert Spencer）や、ジョセフ・チェンバレン（Joseph Chamberlain）の見解、さらには慈善組織協会（Charity Organisation Society）、COSのでの経験などが若き日のピアトリスの思想形成に与えた影響について論述をいたしました。

第2篇ではピアトリスとは義理の従兄妹の関係にありますチャールズ・ブース（Charles Booth）と共に行った有名なロンドンの貧困調査、さらにロンドン経済学校、現在のLondon School of Economics and Political Science、LSEの創設にかかわる教育活動、それから協同組合運動及び労働組合に関する調査研究等の過程を通じて、ピアトリスの思想がいかなる発展を遂げていったかということについて検証いたしました。

第3篇では、彼女がかかわりました1905年から1909年までの「救貧法並びに貧困救済に関する王立委員会」（Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress）での活動を中心に検証しました。

ここで申し上げなければならないのは、1994年に私が今所属しております淑徳大学で16世紀から20世紀にかけての『イギリス救貧法及び社会福祉の歴史』という重要文献のコレクションを購入しました。そのコレクションの中に、実は今申しあげました1905年から1909年までの王立委員会の議事録がすべて収納されておりました。当時、私は大学の研究助手でありましたが、その立場でこの資料を自由に活用できる環境にいたという幸運が、この本書の作成に非常に大きな影響を与えております。

ここでは主にピアトリスと、他の委員の諸説との比較分析によって彼女独自の福祉政策理念というものを浮き彫りにしました。また彼女が広く普及させるために行った大衆啓蒙運動などについても積極的に評価しました。

第4篇は結びの篇としまして、ピアトリスの福祉思想の位置付けを確認しながら、功罪を明らかにすることにより、その歴史的意味を検証しました。

さてどういう結論であったかというところではありますが、だいぶ端折ってお話をさせていただいておりますが、問題の所在の中でも述べましたように、ピアトリスは夫であるシドニー・ウェブと共に、フェビアン協会の理論的指導者と目されておりまして、特に社会福祉学の研究ではナショナル・ミニマムの原則を最初に提唱した人物、あるいは提唱した人物の妻というような位置付けがされておりました。いずれにしても、シドニーとピアトリスの共著で多くのものが発行されているものですから、その分析から評価することが一般的に行われてきたように思われます。

本書においてはシドニーとは別の思想を有するピアトリスを、夫から切り離して検

証した結果、社会福祉学における彼女自身の貢献を正当に評価することの必要性を感じました。例えば、ピアトリスがみずからは中産階級に属していながら、内面世界での自我の葛藤を通じて、階級意識の克服に努め、一市民としての視点を常に持ち続けていた点、それから 28 歳のときに行った経済学研究では、すでに社会福祉学への発展の基礎となる人間的要素を重視している点、さらに貧困・低所得労働者・救貧法等に関する膨大な社会科学的資料を一般に公開し、社会福祉学の発展に大きく寄与した点などは、イギリスの社会福祉の歴史の研究の中で、今まで軽視されてきたのではないかという指摘をしました。

非常に雑駁な説明で申し訳ありませんが、以上が本書の概要であります。なお、本書は「あとがき」の中にも書きましたように、これまでお世話になった多くの先生方の非常に熱心なご指導と、それから先ほどちょっと触れましたが、貴重な第 1 次資料を豊富に活用できる環境にいたという幸運が重なり、さらに今日もおこしですが、編集と出版に関しましては、ドメス出版の非常に積極的なご援助により、作成できたものであることを付け加えさせていただきます。

さて、以上が本書の概要ですが、それだけでは読んでいただければわかることですので、あえて今日は本書に対して多くの先生からいただいたご指摘あるいはご助言を紹介させていただき、今後の課題を示させていただきたいと思っております。

本書は日本女子大学で審査を受けた博士学位申請論文がその礎となっております。

その審査過程で、「本書は極めて着実な第 1 次資料分析に基づいて、イギリス社会福祉史上の先行研究の不備を補い、歴史的事実への再評価を問題提起したのみならず、社会福祉学の理論研究における歴史研究手法を取り入れた重要な研究成果である」と、過大な評価を頂戴しました。

その一方で、幾つかの課題が指摘されました。まず、本研究で課題とされるような「通説」を反論するためには、「通説」が「通説」になったことへの分析と批判的検討を前提とすることが必要ではないかというものです。ここで言う「通説」というのは、例えば知的レベルの仕事、あるいは事柄に関しては、常に夫であるシドニーがピアトリスを指導的な立場でリードしたという一般的な認識がありますが、それらに対して、例えば私は協同組合研究や、あるいはナショナル・ミニマムの基礎となる共通規則 (common rule) に最初に到達したのはピアトリスであるというふうに述べております。そういった反論を幾つか行っているのですが、「通説」が「通説」となったことへの分析が必要というご指摘は大変重要なことだと認識いたしております。

それから、19世紀から20世紀初頭の段階におけるピアトリスとヘレン・ボーザンケト（Helen Bosanquet）、この人は同じ時代を生きた女性の社会事業家で、特にCOSで活躍した人ですが、その二人の対比を現代の制度・政策論と技術論の関係に對比させる試みは適切とは言えないのではないかというご指摘を受けました。

また3番目にピアトリスの主張である「協同的共和」、この協同的共和というのは本書では「協同主義的共同体」（Cooperative Commonwealth）という表現で統一させていただいております。その理念を改めてどう評価するか。特に社会思想としての意味、あるいは国家の関係等について検討する必要があるのではないか。

4番目にピアトリスの歴史的評価という点では、アメリカCOSとの交流、あるいは影響等についても検討すべきではないか。

5番目に最近のウェブ夫妻への関心はフェミニズムの視点から見直される傾向があるが、ジェンダー論からの研究も参考にする必要はないか。

6番目には全体としてピアトリスの思想の現代社会福祉への影響という点に関しては、これからの課題として残されており、その点でピアトリスが使う用語の概念、例えば市民とはどういう概念として用いるのかなど、より精査な検討も必要であろうし、また思想形成に持つ生活者としての内面性や、それが政策理念に発現されるときに主体性の重みを認識すべきではないかというご指摘であります。

これらは日本女子大学が発行しております『博士・学位論文の内容の要旨と審査結果の要旨』の中に書かれております。ただ、これは本書が作成される前の段階、いわゆる原稿の段階で受けたご指摘ですので、一部修正がきく部分は本書において修正をさせていただきましたし、1年半後に出版されるときには必要に応じて加筆もさせていただきます。

次に、鉄道弘済会の『社会福祉研究』第72号の中で、私の本を取り上げていただき、書評を岡田藤太郎先生が書いてくださっております。岡田先生はロンドン大学のLSEでロバート・ピンカー教授（Professor Robert Pinker）のもとで指導を受け、またT. H・マーシャル（T.H.Marshall）等の訳本を多く輩出されておりますが、私自身も同じLSEで同じ先生に学んだという関係から、日本に戻ってから非常に親しくさせていただいております。

その岡田先生は書評の中で、「『ナショナル・ミニマム』のアイディアは、労働組合運動の中から生まれたらしいが、それがシドニーとピアトリスのいずれの発想にせよ、（著者は、ピアトリスの先行性を力説しているが）、福祉国家主義思想に対する大きな貢献であると思う。マキシマムでないところがみそである。私はその論理的発

